慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	高山, 真(Takayama, Makoto)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.177- 178
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のページにタイトル未記載
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

高山　真

はじめに、突然のお願いにもかかわらず、書評をひきうけてくださった鈴木智之先生と、編集委員会の先生がたに、心からお礼を申し上げます。鈴木先生は、『〈被爆者〉になる』という本では、なにがなされているかを的確に示してくださり、この本がかかえている課題を鋭く指摘していただきました。

ご指摘をいただいた論点のうち、とくに、調査者としての〈わたし〉の迷いや試行錯誤、あるいは変容を正面から記述する方法は「調査者」のふるまいとして「慎みを欠く」のではないかという指摘について考えさせられました。「禁じ手」という表現で指摘された点については、調査の記述の問題として、反省的に（そして、前向きに）考えなくてはならないと感じております。

ご指摘にあるとおり、こうした記述スタイルを採用した理由（背景）を確認しますと、こうした書きかたによってしか書くことができない対象として、3 名の語り手の方がたとのインタビューを〈わたし〉が経験したということがあります。そして、この経験のありようを、正確に表現しようと試行錯誤するなかで、この記述スタイルになったのだと思います。しかし、鈴木先生からの問いかけにお答えするためには、つぎの問いについて考えなくてはならないはずです。

なぜ、〈わたし〉は、長年にわたって、長崎で「被爆者」とのインタビューに取り組んできたのだろうかという問いです。すでに、ご指摘いただいておりますとおり、調査者としての〈わたし〉の変容を語るという選択は、この本の主題的な問いに深く関わっています。主題的な問いとは、極限的な出来事を体験した人は、その語りえなさをいかに言語化するかという問いです。

調査の経験にひきつけて考えますと、インタビューをつづけるなかで、調査協力者の M さんから、実際に、このように問いかけられたことがありました。あなたは、いったい、なぜ、わたしにインタビューをしているのですか、と。彼は、このように〈わたし〉に問いかけたときに、ある答えを想定していたと思います。その答えは、鈴木先生も重要な論点として示してくださった「記憶の継承」にあると思います。

〈わたし〉は、この答えを知りながらも、調査の目的を、その答えに回収することをためらっていたように思います。「語り部」として生きる彼らとの対話をつづけるなかで、〈わたし〉は、記憶の継承という問題を意識しながらインタビューをつづけます。インタビューのリアリティとして、記憶の継承という文脈をはずして、被爆の体験を聞きつづけることは、さまざまな意味で困難です。

高山真「著者リプライ」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）177-178 頁

そのなかで、このインタビューには、記憶の継承に回収されない、別の意味があるのではないかと、〈わたし〉は考えはじめたように思います。鈴木先生が的確にご指摘くださったように、〈わたし〉とは、他者に向き合うひとりの人間として「対話」的に対峙するしかない状況において、その対話の布置によって生み出された関係上の言説主体です。このご指摘について考えるなかで、本書が出版されたときに、つぎのように感じたことを思い起こしました。

なぜ、わたしは、長崎でインタビューをつづけて論文を書き、その論文を改稿し、この本は出版されたのだろうか。このように自分に問いかけたとき、わたしは、本書に登場する亡くなった弟のために書いたのではないかと感じました。他者に向き合うひとりの人間として、「対話」的に対峙するしかない状況において、〈わたし〉が向き合おうとした重要な他者のひとりは、調査のプロセスで他界した弟だったのではないかと思います。

このように書くことは、やはりインタビューやフィールドワークにとりくむ「調査者」の態度として慎みを欠くと指摘をうけるかもしれません。やはり、被爆を体験した人びとの体験をこそ聞きとり、その体験の語りを記述することに意識を向ける姿勢が求められるのかもしれません。インタビューの実践にともない生じる調査者の感情の揺れを記述することは、あくまでも調査協力者の語りを理解するためであるはずだと、わたしも考えています。

鈴木先生は「逡巡にみちた 300 頁ほどの書物」と評価してくださり、その書物が書かれた目的を指し示す箇所を端的に、ご指摘いただきました。しかし、〈わたし〉の素朴な感覚としましては、この書物が、いったい何のために書かれたのか、その目的は、まだ明らかにされていないようにも思います。インタビューと、その経験の記述はいったい何のためになされたのか。鈴木先生から与えていただきましたご指摘と課題を意識して、これから、時間をかけて考えていきたいと思います。

（たかやま　まこと　慶應義塾大学）